

風俗文選犬註解 貳之下

~ 5
5639
4



冊五歌
號五
函五

門
號 5639
卷 4

風俗文選犬註解卷之貳下

江都 葎雪庵午心門人 葎甘々我著



富士ノ賦

嵐 蘭

不二^{フジ}日本^{ニッポン}の蓬萊山也昔孝靈^{カウレイ}五年山をめぐりて現^{ケレ}ハ徐福^{セヨフク}は山下のりて
て仙薬をめぐりめかくや姫も神と化してらるる靈^{レイ}をめぐむ

孝靈^{カウレイ}天皇 大日本根^{オホヤマト}根^コ根^コ太^ニ瓊^ニ尊^ニ 乙亥五年近江国地さけて
湖とらるる同時 不二山 現す

鳥氏筆乘曰 日本必東北数千里山あり不二と号く又蓬萊といふ
必中つらつらき山之三面皆海ありて並上つらきに火煙あり奈の耐徐福
海に入て薬を求む故にまよふとて今又つらつら子孫秦氏と稱す
弁和物語に中将く引くして海ありてかひあをえぬかひとめぬ
りのをめぐりて夢の蓬萊のつらにのみきてあひひらけてはらんとて
あつれかきせぬひて物もきき一めぎの山に於てるるなりうらうら大正上達部

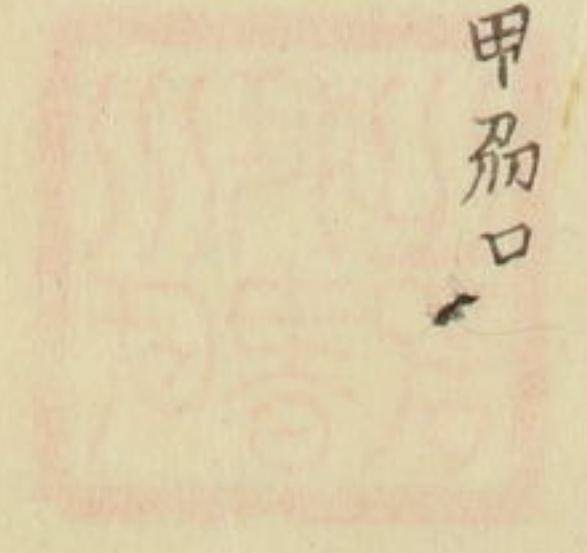


をめでつづの山々天は近きと曰くせぬあはれ人そらひするの必である
山々人び都を近く天も近く作らるる山々をきくをひて

かのもも不死の世あはれつが男くは使たまふ子あはれは月のはら
さくつづ人をめくすつづの必あはれ山のはらきよもつづはは
おのせのふゆあはれ不死のくすりのつがあはれて火を付てやうくす
作らるる山々兵者あはれつが男くは山へのあはれもあはれ其心と不
死の山とハ名付る其あはれつが男くは雲の中へ立のあはれつづの傳へる

峯ハ八葉よつづ根ハ四列よつづ道路ハ三列よつづのあはれて千のあはれ
裾野ハ東西よ長く百里よつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ
近ハ夜陰よ旭をかやうなる天よ雪をのりつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ
和必異朝類よつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ

八葉ハ薬師嶽 觀音嶽 地藏嶽 大日嶽 不動嶽 阿弥陀嶽
釈迦嶽 四列ハ駿河 甲斐 相模 伊豆 三ノ口 吉田 大宮 口 甲 扇 口
本朝文釋 富士山記



富士山者在駿河国 峯 如削成 直 尊 屬天 共高
不可測 歴 覽 史籍 所記 未有 高於 此 山 者 也 下 畧
又貞觀十七年 吏氏古きよつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ
晴作きて山嶺をのりつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ
ふ山嶺をのりつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ

古老傳云 山を不二と名くハ郡の名也 山ハ神あり 淺君大神とつづけ山を
さくつづの雲表を極めて我れをさくつづの頂上平地あり 廣さ一許里もの
中央よりくつづの鏡の如くくつづの底ハ神池あり 地中大石あり 石の體
あやも純青其鏡のそこをくつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ
てのくつづの煙火をくつづの亦其頂上よめつづの池行生つづの青細葉
て宿雪春を消つづの山腰以下小松を生ハ 腋より上つ方又生くつづのあはれ
くつづの白砂山を成せつづのくつづの者腋下よつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ
ゆの白砂流るるをくつづの相傳ふ昔 後居士とつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ
よのあはれつづのあはれつづの者皆類を腋の下よつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづのあはれつづ
下より出逆ハ大河とつづの兵流 寒泉 旱 盈 縮 あはれつづのあはれつづの山東脚

下小山あり俗に新山といふ平地あり延暦二十二年二月雪雲晦冥十日
日下てのら山とるあり霊神の造也

義楚六帖

後周齋州開元寺講俱舍論賜紫
明教大師進叙氏六帖義楚集

日本国亦名倭国東海中秦時徐福將五百童男五百童女止此國今人物一如長安中畧東北千余里有山名富士亦名蓬萊其山峻三面是海一朶上聳頂有火煙日中有諸宝流下夜即却上常聞音樂徐福止此謂蓬萊至今子孫皆曰秦氏彼國無侵棄者龍神護法不殺人為過者配在犯人島其他靈境名山不及一一記之

日本武尊伐東夷至駿河國浮島原與阿部市東夷賊尊詔狩獵令遊御廣野日中縱火于時十月之旬草枯死而宜添火

つめて牧狩をむる鳴沢の池を倭成の仇名をく人危の奥に仁田々分列さ

恰如塗油已進而尊之軍至テ危所帶之ムラクモ叢雲劍ツル自ラ腕ヲ拂テ野

火依之有草薙ノ名
赤多死傳具其乃みやつらつらまをさくけ中の内大沼ありけ
入ノつらつら其水のみやつらつら其神をささげつらつら
ぬクちんクめクハニ倭比賣命の給ふる由袋の口をささげて是日
ハハ火打を有りぬまはつらつら神をささげつらつら
少を打きて向火をつけてやまを付けてかかまハ其水のみやつらつら
暗きつらつら即ち火をつけてやまのひさ

源頼朝建久四癸丑年五月天下の武士を集て富士山牧將あり

鳴沢の池を倭成の仇名をく
さみみハ其根も雪のしらめりてさきハ不二のつらつら
けくつらつらさきハ其根も雪のしらめりてさきハ不二のつらつら
る我兄弟の社名我中村あり

謝語 ちんちん 小袖むつら

祐成、袖川のるせ、あつみちり
祐成、袖川のるせ、あつみちり
祐成、袖川のるせ、あつみちり
祐成、袖川のるせ、あつみちり
祐成、袖川のるせ、あつみちり
祐成、袖川のるせ、あつみちり
祐成、袖川のるせ、あつみちり
祐成、袖川のるせ、あつみちり
祐成、袖川のるせ、あつみちり
祐成、袖川のるせ、あつみちり

後、ゆき、十部、ゆき、ゆき、魚眼

五部、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、指の先

大坂のゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

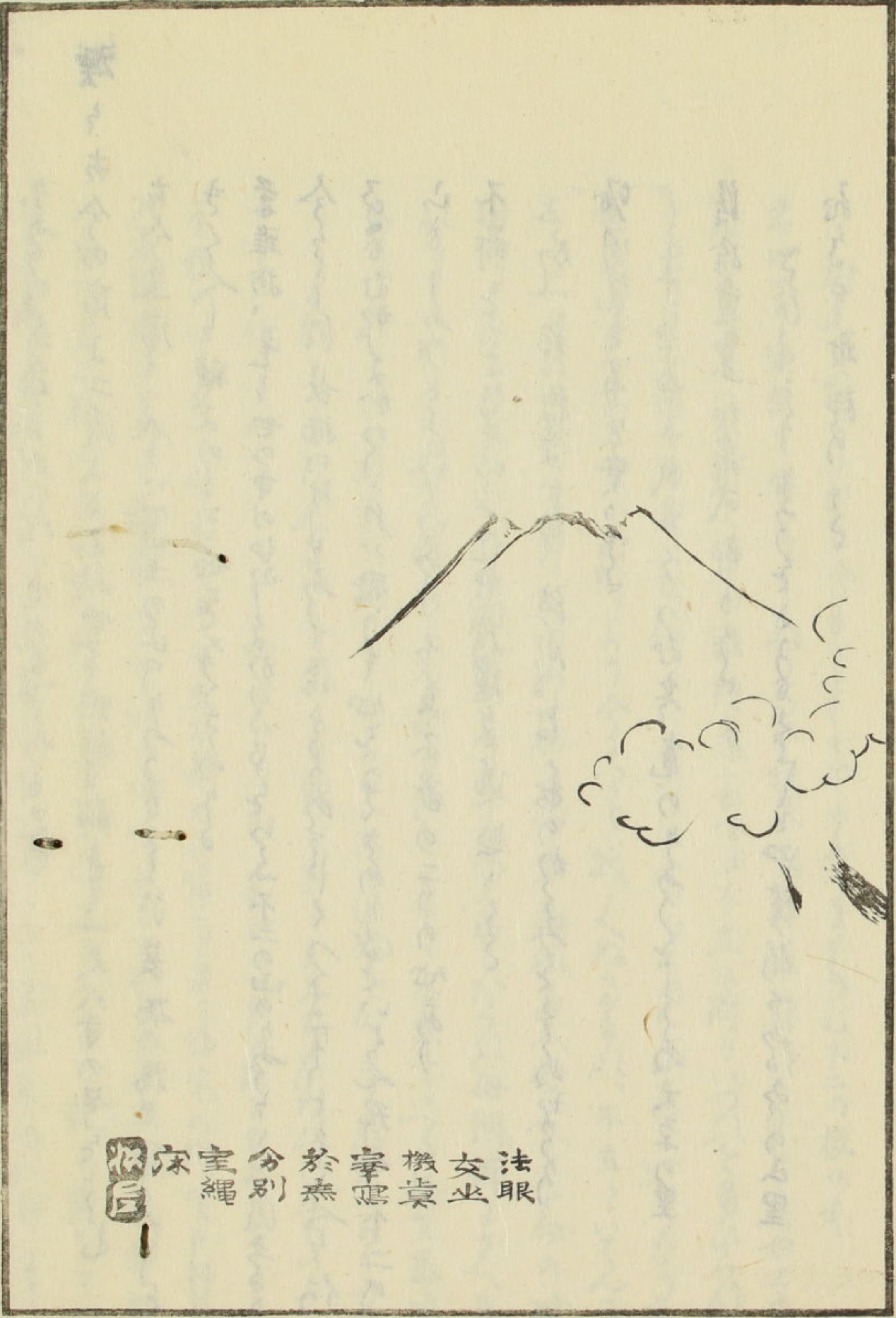
ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

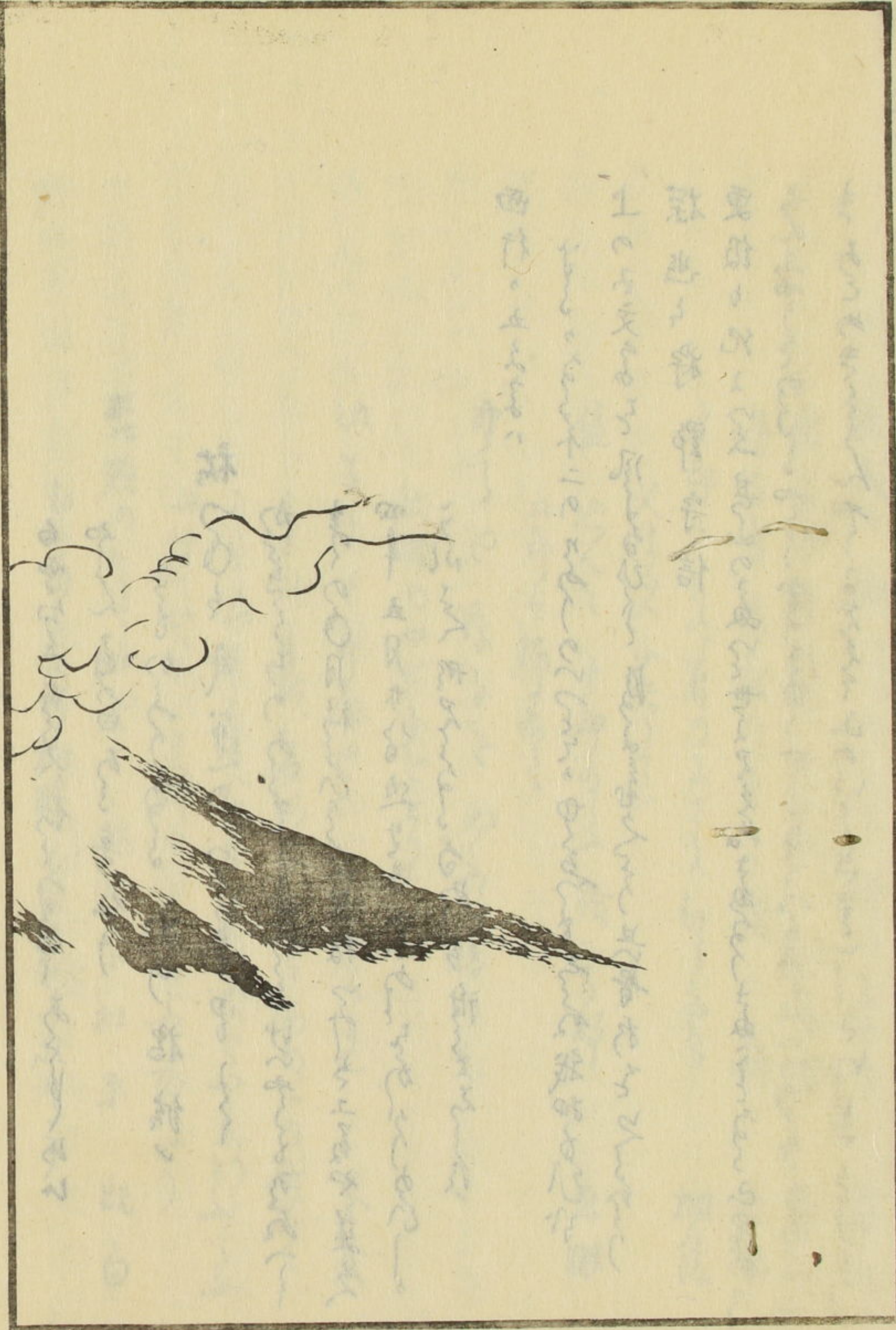
ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき

ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき



法眼
交坐
機雲
寧靈
於燕
分別
室繩
寐



りあつての立のちるまゝにたのまじりて

煙々あ今の序より二流よりまゝに雪を廻りて掃きて一尺八寸の号をよむ

古今集序 今ハ富士の山よりあつてまゝに長柄の柄をうつりて

きくく歌よのこころをまゝにまゝに

采雅州は是れ世の中のみかきかきつるまゝに不二の山のりあつてまゝに

今もまゝに長柄の柄をうつりてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

ふもむかまかつてまゝに歌よのこころをまゝにまゝにまゝに

ふもまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

不断をまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

かゝ錦枝よ一むら歌よはは秋のわづらひをまゝにまゝに

坂川院百首公實まゝに

本をるて凡本まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

拾遺集和泉式部まゝに

さひまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

死す并附のりまゝに

時をのちひと今まゝにまゝにまゝにまゝに

右四首通無々實まゝにまゝにまゝにまゝに

花を并あはハ不断を月日雅行為家つは不立不断を月日

とあハ不断を月日とあハ不断を月日とあハ不断を月日

通あまハ不二のりあつてまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

回心て不立の義をいつて為相切おきて父為家よたれ母阿佛よまゝに

しつて別さりまゝに傳りて不断の義をすて不立といつて短文意味

卷二下

下

いづれあまのつれづれとつひのなる

雲々廻りて怖として一尺八寸の号をとらむ

一尺八寸を差雲とすむと我作午心つう又あな春秋菴梅笠曰坐之さ
一尺八寸の物之坐雲のよみありとらあり一録の尺柄よは一尺八寸
かりありて一尺八寸村とてかりあり村といふあり我曰一尺八寸のよみ
坐雲うらうハ吹といふ謎ハ尺八大軸長サ一尺八寸故以為一尺八寸
倭漢三戈圖會ニ云 腮オホカセ音鼻

南越志曰腮ハ異四方之風也常以五六月一發未至時鷄犬為之
不鳴 嶺表録云 秋夏之間有暈 如虹謂之腮母蘇子瞻曰
斷霓飲海而北指赤雲夾日以南翔此腮之漸也其風發すハ
輒拔木掀瓦舟楫漂蕩ス

勢列尾加濃川 彈列不時暴風つるあり俗是を一目連と
いふなり神風といふ其吹や木をぬき家を倒す破列衣せぬ
つらりのなり勢加多な山は一目連の祠あり相列を録風とい
ふ跋品を惡禪作の風といふお借ふ其神取人のや徳を乃

禪定チンテイのくら宝冠ホウクワンはからを つみ下向通と小袖のゆをふ 絶頂ツェツテイの勢セウ
半版の雀巢セウサウ鳥々大心ダイシンをて伊子の松山マツヤマはね 水多の羽音ウノネハ臆病
にまて都の方ミヤノカタ遊ユウ

絶頂の勢々頂の池水ツェツテイノセツツツノイケノミヅこのころを生けとて三戈圖會云不二山乃
麓江河の交マタこのころ山神ヤマノカミ愛すありて不二山フタヤマ諸人シヨヒトを
愛す大心ダイシンをて伊子の松山マツヤマはね

あゝ人つふ不二フタヤマ靈山レイサンなる故は其山の巔タネなる遠物トウモノにして疾ハヤシ
烈風レイフウの如く四ヨシ風フウなる山ヤマなる松山マツヤマ村ムラ秀ヒコなる不二フタヤマの巔
なる一ヒトなる松山マツヤマなる四ヨシ風フウの巔タネなる一ヒトなる不二フタヤマなる

止トドマるものすまらぬわがて行ユクはるはるなり
伊良記イラキ 保良村ホウライムラの伊良古崎イラコサキ一里イチリなりて三河ミカホの地チつは

よて伊勢と、海をたてて... 故より方角... 伊勢の志
原よあしひい入らう皆山とつら... 東も北も南の海の果つて... 何れ
て海もあつて... 伊良古志

平家物語 卷五

九月廿三日の夜... 平家の兵を源氏の陣と入り... 伊豆駿河の人民百姓... 軍は怖れて... 山をかかれ... 源氏の陣
の遠方のまき... 伊豆の武者... 水も... 何れ... 平家... 源氏の
共におも... 大風... 甲斐... 源氏の大勢の向... 氏不二の裾... ふせり

富士の山嶽のちつよを

禪定や珠敷をみる 雪乃床 文録

雪乃床 不二の裾 福印の柳

山本草のかき 不二の床 山雪

夕顔... 不二の枝 柳

不二の根や代の春 許六

水... 富士の雪

不二の山

不二の山

不二の山

富士海苔不二 不死甘草 富士貴氏 栗柿 松檜の木... 往還八井の
下 越根京越 笠足柄の雲 横けりの 実荒井の 港口 佐ねの山 越海を...
上... の人首を... 希ね 駿河 基... 諏訪の湖... 雪

と後一甲品の府より云つて... 扇の画を多し...
むか東海道不二足るうらの山の影を... 其中に...
柄清見横を... 是を不二の三宮といふ...
後横を... 人れは...
いかにせん... 心を原仲正

舟の不通富士の裾ありあり... 波相... 舟の界なり

建武二年十二月十日新田足利... 合戦... 太平記...
芝瀬川下流不二門... 合流... 海苔を生け不二海苔... 芝川海苔...

つらつら 万葉集

鳥トガ 總まあ... 船本より... 船本を

我せこそ山也... 山の花のあ... 船本を

箱根らりと竹相高とかけり桓武天皇延暦廿一年癸卯相模同足柄路一関

笠ヶ荷路以不二焼碎石塞路也翌年五月癸卯笠ヶ荷復足柄旧路

昔より詩歌連歌の句合を... 是をつまひ大... 山のをさ... 比せん...
と古今の... 一首... 者... 赤人の白... 其余... 山は對して...

一こもなりぬ富士吉野の白一生... 東海... 越人... 不死...
二の詠... 心を黄... 東海... 不死... 一せを

宗祇は師傳書記

上や... 宗祇... 不死... 今に

あやうに... 不死... 今に

まか... 不死... 今に

な... 不死... 今に

七車... 不死... 今に

又... 不死... 今に

暫... 不死... 今に

に... 不死... 今に

い... 不死... 今に

た... 不死... 今に

鬼つ

又竹の根（竹の根東へまうぬつふ）おわててふ不二の雪根の雪（雪は白く天外より来る）もてこいけしとありて感（感は心）もて其時其地其情おのつて備（備はし）まの古のぬるもの赤人短歌の神（神はま）は一首をまする（然得南山）は竹の根（竹の根）とけり其あそひの事とこれいふくはかけりおきて又ゆゑなるまはれ其まててて無然（無然は心）ててて心（心）を註せり何れと頼政（頼政）の思を好みてけ心をすくちりゆふる事

近の竹やまゆり入は物とめり比良の雪根の雪（雪）をまて

唐崎のねり花よりおほりゆめ

ままおとげも意をまよる（一）付頼政の歌は比良の雪根の雪をまてり（唐崎の松のかりきを詠めやくる）とみ我おの祖（祖は）あふ赤人の歌の意をゆられん（比良の雪根の）とてまらぬ頼政の思をまてり（比良の雪根の）とて

細川と首曰東陣の時不二（不二）の雪根（雪根）をまてり

不二の雪根（雪根）をまてり

万葉三詠不二山歌一首（短歌）

不二の雪根（雪根）をまてり

不二の雪根（雪根）をまてり

草庵集

雪ノ八月や ちかちか 共白

東のついでに 時をわたりて 共白

藤のついでに 時をわたりて 共白

田のついでに 時をわたりて 共白

一尺八寸 越つて 共白

坊上ちを おもむい 塔は 風雲の わるを

一尺坊と かやうに 空階を 垂る

よまを らるゝ 葉あはるゝ 春あはるゝ 春廿

夕霧の風雲を 一尺坊と 越つて 共白

湖水ノ賦

李由

近江の湖水なりて大宮に近きにして近江のつら遠きを遠江と号す
仁皇十二代景行の御宇志賀の郡に近都あり高穴穗宮に行幸す
三十九代天智帝大津の宮にうつり癸卯の御宇保良の都にうつり

書紀 景行天皇四年二月辛未美濃一冬十一月自美濃還則
更都於卷向是謂日代宮

日五十八年春二月近江に宮を遷す志賀と云とせすまはたりあふ
かの宮といふは十月天皇高穴穗宮に遷す

天智天皇六年飛鳥岡本宮より近江大津宮に遷す
山形山形五年五月大海人大友二皇子の軍ありて平らきて大海人

皇子を命ずる清和の宮に天下に近江の宮ありて皇太子
の癸卯の宮に遷す天平元年号を用天平寶字五年

都を近江の保良とす
近江の保良とす

上ノ玉と稱す仁皇七代孝靈五年地裂て湖とるる同時富士山現す

淑後世の比叡山といひ延暦寺の事ハ日吉をハひよとよむと
おもひ別るるやめくまれも日吉をかく比叡といひすとくさるる
年一住吉をたハすハのしつてすかるといふらちのりしと聞い
比叡を佛寺と建てて神をも其寺のちり神の如くして山王といふ
負せ奉りつれ今世といふてハ其日吉といふ者ハなつて山王といふ也
陰徳太平記

永正八年十二月廿五日雪をかりつてふりりかき且よるる
あつたよりあるるはつれハ嵯峨神の方よおなられに御中
りるるあまの西芳吉の佳境に目をよめりあられに比叡山といふ
者をかき上り人やも物もまきれハ神の不二の宮をかく耳と
おひく

大内義貞

わくしきを東の不二の宮を今京都の雪の跡に
は歌天竺のなつれハ香も御製
雪よすし山王富士の宮言の系の代々の其名も雪の上す
山門傳曰望の三點は横の一點のり三點二の源理め

意々望と空也上下をさけゆも上ハ空下又空也横も似也ハ方
より万法ある故は空は三あり故は望の三點あり三ハ空也中底
に右をあらり横の一點あり左ハ横の一點を中と横の二
點ハ似又三點あり所謂空也中底也三ハ似即して理は空あり故
に望の一點あり山々空すして三を具し王ハ似して三を具す也山の
横の一點中王の望の一點中也中道ハ猶空猶假も是則神の
名也三諦ハ佛法のち神佛名理一辨すて無二あり
延暦寺根本中堂ハ延暦年中傳教大師建立其外三塔あり
横川飯室無郵寺りせくのち傳の造立あり
四明山嶽ハ比叡の絶頂也山王社あり十町半花つきの社あり
傳教大師の母堂ハ徳夫人を祀る卯月ハ花つきのハ女人を祀る
して社近詣すて四明くけり中堂あり八丁のちる宮ハ大岩三ツ石佛十
件あり村あり根世のち比叡四方のちるハ西のちる
むかハ比叡山と三井と不詳なりハ附あり三井とあるる

在り 寺ニ見ニ北兵左

とつひやうらぬ

山 諺 東 東 東 東

と對せしは二白心傳一寺とら三井寺とあつひやうさとハ比呂尾と
字とあやまりしるすもろくやう傳へし故もなり下心らなまるとき女なり
女入まんせいとう比呂尾を寺とてんとうとつふまう山ら比呂尾とら東
東東とらニまきく仙とまきくハまろくよりあやまりしとらまき
小岳たまうニま一の對なうは對の下心聖道子のあやまりと
昔よりつひかきたつら我傳をえちうとて武勇を東と
文音のつとらうらなる

鏡山は浦生郡あみ岩のちののらまう 古報ま

伊吹山は近江美濃の堺より西に近江坂田郡東ハこの不破郡

神名帳 伊夫岐神社

ちの化 日本武皇のつちまろくは山の神と空にまろく
かれしとあけしつちまろく山の地よりまき猪あけし其たきま牛
のめくまきかれとあけしつちまろくは猪よるまのハ其神

のつひのよそあめあめかつてん時めとてこのつひひてのつち
ちまきまよ大水雨とあけて日本武皇をちまろくりきま
堅田十右衛門

その月の跡長たをよまのニまよいさめておを堅田の浦よる其日
申の時又何某歳を成秀とらふ人のりらよいし 醉狂者月チ
うかれてまねくと声くまよるままおひうけおよりまきまを巻ま
塵を掃る園中ま草ありまけあう難射の切目たまよるままおひ
れとるよまよまをのつて其まをのひ月を待やとらまおひ出湖上花
やうにてつひのつち仲の秋のつちの日の月陰の堂まきまを鏡
山とらまよるままおひまを遠うしと彼堂上の様とらまよるま
三上水堂の丘南やまらま其まよるままおひまをまよるままおひ
いあやとに月と草と下黒雲の中まかまらまらま鏡山とらまよるま
曰れく雲のかまらまをまよるままおひまをまよるままおひ
金風銀波千仞傳りまらま映のまかまらまらまのまよるま
極まの秋息の詞とらまらまのまよるまのまよるまのまよるま

よもぎのうらみは堂はたひてそそめし心僧部の衣もさるるのうらみ
しりらあーいふも身よあつてまぬるうと兵さあてゆらんやと
思よよををあけて月ハ横川はゆらん

鏡明て月さー入よ後世堂 あり
あーいさよふ 日の聖

かて三重の鳥よあつて湖水の月ハ舟を流んと物このむ人の風情を流
るに松ハ飄々人の唐よなれと扇ハ葉緑のうら男あれ赤壁の
影のうらまもあつて波や赤心の波のうらめあふ鏡のふ
ふこたのうらまもあつて横川の松よつてあつては良のうら根
は居るうらまもあつてうらまもあつてうらまもあつてうらまもあつて
けのうらまもあつてそこは楓櫛の霜もあつてん夫持のゆ帆をう
言さよてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

春日や湖水さうううう七山河 あり
竹の葉あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
東のみつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

さしやうつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
鶴ふや 比良うら ぬら雪けあ 雪由
えつぎや 一めんうら 世田の柳
時き 徳田うらうらまもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
湖や 心けうら 四方の花 小枝
るや 通けうら 川の取 乙刈
指つや 志うら 曙子の峰 素洗
比嘉のうらうらあつて

松ら唐崎千この松連ハま脚又居るうら 萬葉から四川ハ肥うら 柳大根
兵全葉ハ幡紋を長渡結高宮布野例さし 高島硯武依里堂
白部石船木枝木庭石ハ木戸よまうら 益山の衣砂ハ大洞の白石
是方解 伊吹の産ハ蕎麦あつてみ艾石反葉種ノ類すも 岩木 日野
梳ら會津の根中あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
田采醒サ井藤多賀抄子繕村鑑四十九張のきせる池の川の惣針守

山鞆 小友鉄炮

志賀のかきさきの松さいつらんちねふりてかきとあはるるのりて
大塚の山城のり松を踏のりちねのり松庵東玉雜齋直壽とて
二人あきさきい松のりつねのり松をくおのりひよ青の雜松つひは松
情ある松をさきひて挿る天正十九年の松のりなるりきける尊朝
松親王のりせりつるかかの松の記をええて扶素拾葉集あよのせりぬ
まう今の松は是なり

幸崎の松は花よりのおひるのりて ぬ
かきさきの松は花よりのおひるのりて ぬ

千この松系は彦根の城近きあなりちねなり
志那と蓮の名あなり栗を郎夫揚也倉山田支那と並て開るる
四川兵生ハ幡長濱ホの名産物と解なるり人の志なるり
伊吹山大平寺ハ蕎麦の名産と大根なりかきさきの松は是なり
百々薬ハ彦根家中百々市賣求傳安産のめ薬とて今又共あなりぬ
四十九院村越智川と高宮のりさきせるを高くあなり

依本家譜と弘治元年五月二十日有唐人名ヲ曰長子ロ一嘗テ
自南蠻渡海到琉球尋来日本多祿島教鉄炮術先月
入洛見將軍家而傳其術便長子口預佐々木今日未著
江州同廿八日居近江北玉友村賜百貫領地

多賀ハ近江玉山上郡多賀の神社大社なり町森多賀子と賣
たむけ 伊那郡改大神 彦根 多賀はすまのりなり
此松子 多賀神社 飯盛木は松子ハ赤松昔時 聖仁帝の御後伊
弉諾尊當此社より十八町東方山中ハ木あり是を製して飯を
饗す調なよ用れハ萬の毒を保つて長壽を保つる詭宣よよせら
れ赤ちハ勅令あきさきの山ハ入山樹とてハ神勅の如く是を割き
鉄のりハ敵魚斜なるり別ハ林を飯盛山と勅号を賜り今連
松として年々十月初子の日よりハ樹を製し古例の如く元旦宗
上ハ松ハ鉄のり松子の製造の者なるハ往古の形なりハ今もあなりつ
毒をのりさき長壽を保つ神秘の良薬也記はあなりハ今もあなり
本

武佐列の八合伴 是柴田勝家之製 軍中兵糧師也 瑞無の子 瑞無本家、是足磨也其子孫、大津守ハ
 兵糧杖本を能く かまつらの生食も かまつら者、又マテテ今昔之 湖中の獵師ハ尾
 上尾山に編者 をいひき石垣突ハ阿野人を天下に用ひ白鬚の山神ハ七文
 の芦原 をいひき石垣突ハ阿野人を天下に用ひ白鬚の山神ハ七文 多賀日吉の神社ハ
 ちりり をいひき石垣突ハ阿野人を天下に用ひ白鬚の山神ハ七文

飛騨平土化 往古古澤の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる
 飛騨 其の宮つらふお村飛騨より良成多りてはる

秋の日のあつたの心のあつた大澤の里のかさささ

大澤の里のかさささ

大澤の里のかさささ

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

尾上尾山 あるあるは奥の尾上尾山に住居せり今もその孫傳へて湖水の邊を貫き

白川院の湖とちん心は伊勢の加茂川の水 双六の巻 山法師

天保元西申年六月廿日我京都へのちん心は伊勢の加茂川の水 双六の巻 山法師
 五月の末甚る赤つぎ中山道の川へ洪水して野洲川とせり湖上を舟多く
 大津近つとんとや川の三里斗ふ福徳とつと徳村ありこれ近お舟多あり
 いづるさうも大さるる湖水洪水く水き一丈余もまきさう水辺をき村へ民
 家を流し田畑を損す八百八川流入して落口瀬田二口がれ水急はく湖をか
 丸水郷をへきまらふ福徳と彦根の城をうへ兵主大明神の社あり兵ををか
 よきは社へ兵主菩薩とてふは石の産すくは大きく味ひまらうとやう福
 徳とて大津近湖上十里ありまらう便舟して大津くりる湖水濁くよにいで
 村へ香水は難長才鯉鮒鱒のこひ泥水よつとていづる水よよくかきつ
 湖上へ五里斗漕を湖のま中はとありふあうに濁水の中を一助矢の舟へ
 水あり清き水晶の舟へひやうとて水よよくかきつ舟へ用意あるたまの
 桶七つハッはぬらうて香水に用也近村留まらうとて香水を汲とてつと舟
 中へいづて葉をまらした味ひかりけ水肺をなげし一助の川をなせ舟
 へよく常くまけ水ありやうとて舟へ常く湖の水清きまらうけ水く

白氏文集 錢塘湖ノ石ノ記
 湖中又有泉數十眼湖耗則泉湧雖盡竭湖水而泉用有餘
 湖文似我らるる水肺のさあはれかきつとて
 湖の神は錦の影はあまらう舟屋の社へ源氏の大将より威を益とてつと源四の
 宮の神社へ源の八幡と豊満の神へ幡字を守り宗禎の神明とて土座の近坐なり
 彦根山の天神は美津彦根尊とて奉り金徳の山神とて金龜山とて近とて五口

白氏文集 錢塘湖ノ石ノ記
 湖中又有泉數十眼湖耗則泉湧雖盡竭湖水而泉用有餘
 湖文似我らるる水肺のさあはれかきつとて
 湖の神は錦の影はあまらう舟屋の社へ源氏の大将より威を益とてつと源四の
 宮の神社へ源の八幡と豊満の神へ幡字を守り宗禎の神明とて土座の近坐なり
 彦根山の天神は美津彦根尊とて奉り金徳の山神とて金龜山とて近とて五口

おむ平田山鳴宮の天神ハ旅所之流天神ト天津彦根令也木徳の神トて千の
のちも宮居のよき神代より何より大仙言経信贈答の歌も彦根山とよめ也
山上の觀世音堀川の字寛弘三年白川の上皇の女の地あり神社佛若金
龜山乃城の爲に地をくつて今のお野寺に同坐あり

新羅の神々長等山園城寺のわらあり天智天武地統三代の天子の神
生湯よけの山をくつて泉をきりて井をいふのら三井に改練の
頼長の子と八幡の氏より八幡太郎義家より改を改の氏より
加茂の源氏と三男をいふ神の氏より新羅の神を完く源氏の右將
より威をきりていふ是あり

大伴四の宮の神々新羅の神々新羅の神々に天孫才四宮あり
彦根山中右地

寛治三年十二月十日攝政殿令來詣近江国彦根寺給
廿二日太上皇令來御彦根給
天皇皇ハ白川の上皇より
大仙言経信贈答歌 木本集

近江彦根根といふ所は觀音の證ありとみたりありに右大兵
みちよりまきりれあり傳りて其のめとのにひやあり

彦根と書きつとゆふと八重の雲井と書きつとゆふと
よとて彦根の山の形ありと心も時と書きつとゆふと
万葉云 彦根と書きつとゆふと八重の雲井と書きつとゆふと

息長の宿禰の皇子ハ息長と書きつとゆふと
新羅玉天の日牙の末但馬日方といふ人の女と神切皇后の母と書きつとゆふと
今龜山の城の爲に地をくつて

井伊彦根長の役に切あり石田の領を井伊彦根と書きつとゆふと
彦根と書きつとゆふと金龜山の地と書きつとゆふと
根の門の形ありと書きつとゆふと

石山々觀音道場あり白瑪瑙山々貴人令と書きつとゆふと
園城寺鐘は名きりむらと書きつとゆふと
石光山石山寺如意輪觀音頂礼十二番札所 巽基良辨僧正



奥の岬
猪ヶ崎
猪ヶ崎寺

猪ヶ崎掉飛之圖

奥の岬ハ度根より西南
七里あり此岬の内猪ヶ崎
寺ハ不動尊あり

六月廿日
掉飛あり
此岬の内

岬の岬



素書堂印

坂中西教寺ハ天多座土の一本寺堅田の浮山堂ハ恵心僧都の千作佛
 長命寺は順礼のれよあり九猪崎の不動の掉尾の街よあり久取の地
 花本のもの地石塔寺ハ天行工阿多日王の塔をよめ是所謂八万四千塔ノ也
 日本ニ集止ニワノ一十ト
 平流山ハ行基四十九院を建て都率の内院をよらん
 三コクテレキミムカシ鬼神靈山の一本寺オスミ
 細水後ニオロス共下ニカクヒテ石化ス今ノ龍神山蛇石是也
 高野永源寺ハ寂室派の一本寺
 女人のそゆるるそら番場の辻堂ハ仲時己下のさき殿如是富生の頼文子
 かくれり

浮山堂志賀郡堅田よあり恵心僧都の化左右化佛一千作をよめ
 いの草山堂類史よあり又横所院詔を下して能者基山奇蹟より
 今の山堂魚兵よあり又其跡を以てあかをいふむ
 七月十ウのの二日のる法會あり
 西行撰集所むかり横川に恵心僧都をよめいふの智者いふより
 り行つては蓮供のつうて法のあつてをよめいふのく人わたり
 あつて神き月ののりか家の社よありおひつてをよめいふの
 みくお人作らるるおおめおあつていふのに財の織よめいふ

あしと月月の光を雲よりよめあしと晴ゆく空のまきの里人の
 月を結んものええ侍の格やよありおあつてをよめいふの
 て行るあつてをよめいふの世の定めをよめいふのあつてをよめいふ
 のあつてをよめいふのあつてをよめいふのあつてをよめいふ
 つねをよめいふのあつてをよめいふのあつてをよめいふ
 月花のかけをよめいふのあつてをよめいふのあつてをよめいふ
 恵心寺の春をよめいふのあつてをよめいふのあつてをよめいふ
 いとつてひのけをよめいふのあつてをよめいふのあつてをよめいふ
 比良 伊吹 汶村
 石山の石をよめいふのあつてをよめいふのあつてをよめいふ
 下つてをよめいふのあつてをよめいふのあつてをよめいふ
 猪山寺不動尊ハ掉尾の街よあり 毎年六月朔日掉尾
 奥の島よあり彦根より西南七里湖上よあり比叡の内猪崎の猪崎寺
 に不動尊ありまた掉尾ハ比叡よあり五丈余の大岩あり比叡より大帆

柱を水上より出さずは帆柱を掉しつゝ又たきつゝ柱はなき鉄を付
くゝとせぬ所もありは掉の上より舟の者水中へ死入るゝの處を
是を掉船といふなり

石塔寺ハ吉朝五奇異の一也竹生島東大寺金峯山金剛峯寺石塔寺
蒲生より二里余あり石塔あり石塔村といふ其村の内石塔石塔寺
不ふむ九輪丸石塔の類皆石塔の形なり石塔あり石塔
石塔あり石塔の形を以ていふむ石の大塔あり土氏に
入滅一百年の後天竺月氏阿育王八万四千の宝塔をつくり十方
世界へ投し其一基もよしといふ十年をたると物見え
源平盛衰記

大江の定まらぬ所にて最性といふ其後唐土よりつゝ山ありは
寺傍毎船池をめぐりあり最性其地を奪ひ僧寺といふ昔佛生
の阿育王八万四千の塔をつくり十方へ投しは日本に石塔
あり一基もよしといふ阿育王といふ石塔をめぐりて石塔を
つゝとせぬ所は彼塔をめぐりて石塔をめぐりてつゝとせぬ

番場辻堂八葉山蓮花寺

元弘三年五月九日北条越後守仲時已下四百廿五人京都六條
の合戦に打ち負て退きありはありて自善寺

當寺に在る古帳あり 執筆 糟谷十郎記

百濟寺の下葉ハ小野道風の真蹟池寺の八天の繪ハ金田也正樂ハ
依本道譽の菩提所コシクハイの狂言白藏主の寺也

道風ハ海ニ奎頭小野道風正四位下參議峯守孫大宰大貳葛絃
男也 三才圖會、金田繪馬出野草とくらみりとのせり

河原武鑑 依本近江守佐方何れに列佐し本居住其子三
郎義秀義朝に仕へて切義秀より子あり婦子太郎左衛門定綱二男中
務お補佐三男三郎盛綱四男四郎高綱五男隱岐守義清六男吉田
法橋源秀定綱にあり其子あり其子あり四男也江守信綱兼之のみん、京
方ニ屬しつゝり殊せり其所領を四人の子供に分ちて大東
寺橋六角京極より大東寺橋より其不忠あり六角京極の二家
に易南をわたり信つ子の四男京極近江守氏信其子満氏其子宗信

其子佐渡判官吉氏法名道善なり

百済寺ハ愛智郡観音山のふもと也 盛衰記云

山門すてに本堂一室せしむ義仲さく都進くせめしつてとて越前の
玉村を立て今城はつて寂賀山を右なるの山をこゝ築く隙を打ききり
月江原を打後大橋の村八幡の里湖上をうに足りて平方あきつよつく
まの浦くをこゝれハ十代の松東よりあう大なる出さるる先陣は近江玉三
上山の藤野洲の川原に陣をとる軍兵をこゝれあはるるみちりりある
るゆ状を来のやくするま個よりそ藩生に陣を敷て日数ををりて兵糧余
らるれば使者を百済寺につらてををこゝちらるるまをこゝれ一五百名
の兵をこゝれあはるる其志をわけて當寺の油料をこゝれお立五々をきこせり

らんらんらんらんらんらんらん

泉島堀の林寺の塔頭耕雲庵に白藏主といふものあり又鎮守の稻荷の社
の辺に三足の野狐の白藏主是を巻いて其言曰常に脚下にあり隨仕す
るも侍童の如し其ころ大藏の某姑蘇と云あるは戯るを見
て釣狐の狂言をつらつらせしむ 吡吡の狂言あり

飯嶋寺飯島坊の山頂より市に近きとてむ野寺の鏡使貫の水松尾寺乃
本堂より龍潭の通り建て千年の星霜をかき瓦を寺ハ太子天王寺の瓦を
つらつら其地をい地を埋て今も東西の本願寺の内坊院家一家の寺は清
原も龍潭の禅の道場也ハ千嶺の雪をまみ門ハ八百里の程をこゝむ

飯嶋寺ハ多賀の神社とて大上郡之
龍潭のくくみ毎年昔ハ龍潭より番道をめされく万葉集
とにわくにものにおもひ龍潭人のあすみるハのく一山寺
人々百物集り龍潭の工匠くくくの内成と産をいこゝるそのせり

瓦を寺ハ聖徳太子の建立也
青山寺ハ世々菅のまといふ菅家の遺愛も之安土山捨見寺ハ信長の城跡日
本天寺のけりま七重の礎をまひやくは度留の石額に寺ハある観音もハ
佐々木の城山観音寺也人々後城の城ハ大開秀吉城の持初め坂本の城ハ
明智光秀の城とて依る方の流る藩生あるのころ六角京極の竹本
のりのことと稲毛三郎ハ供の瀬を知り多助をこゝれ一賤ハ麻の七也
鈴々後代も名をあけり

つふらぬらさうら詠つてまきり
 万葉云 十あふひを送つて傳ふたをうへつ時答へて
 りつづの仲よのちもきそとらつたそんそんそんそんそん
 ひつりの山小ねまのふんそん我あひの妹よあそやそん
 くれんそんいそつたれいそんあそいそかえいひつれそんりあうら
 葉よのりく 香國をじつあり 和名抄 蝶さる百未葉 即未葉也
 今昔物語よふ 今いむか 三河玉の郡日まをみたり持て二人は香
 國せきまきくまうけたりとるたにのりつまの香うらうらもやそんけり
 とい男うとみてよのまあけちうらうらかひつれいあもまうくくうらうら
 ぬまハ後者ふり半よるのせしめくかすもあひかきうらうらうらた香
 ひの葉のまはけてくひつれをたけてうてやるひつれにやちまふる
 りぬられひつれを細きて伝ふうせんといひての年ころ細くもいひ
 三四のころふりしよめつれく細くうらにけあふ白ふ大を細けり
 るうい重り物のあふよ入て葉くうらうらてつらうて香をくひつれ香
 ひつれあふたを井らうらふまよあふら香一うたぬ細くもあせうら

たりとありれまかすくく大よ向ひて返てそりけ大ふをまあひつれは母の
 定よのまき葉二の節もいもうあやしくおひいて其葉をけりそんあ
 をまき又巻つけつれにのりまき存ハ捕まに巻四ふみあ半巻くして
 のちあつたれい大らうらあれて死らうら
 葉よよらうら 一 玉中若葉まう 政所田原又犬上殿の山さける葉
 そつらうらまきまきやう 其葉をもむ附のそん
 うらうらむまきうら秋田くらる 秋田女帝あふらうらまきまき
 葉を種を耐て生く時あつらうら 捲れ捲れいつ依て婦の婿
 の附あつ物とけ婦婿とあふひ他のあふ再嫁すうらうらよとらうら
 乃世よあふらうら婿の夜あつて葉をまきの切まてあふらうら
 入て送らる古風のそんりあふらうらあふらあのかれハ替入今葉を婿
 葉よ用ら古風すうら 葉の附り送ら物とならうら元をまきま
 後葉のよ用らまきのあふらうら
 茶よ極くり別葉一とつらあふらうらうらあふらあふら極らまきの
 葉あつ別葉ハ珠光ね花の香葉をつめらうらうらうらあふらあふら

て茶多しつらきも名徳密に字はくはつらしむる也是より珠光
 の別名は傳介なりと云ふ茶の正を別名なりと云ふことハ下りの茶目
 出る自也又を次に刻一ツを一袋といふ茶目廿五斗一其一袋を二ツはか
 つつ由ちの半一とつ袋を廿五斗と初昔後昔といふ昔の半廿一と
 かく二三月廿一とつ袋を廿五斗と昔廿五斗とつ袋を廿五斗といふ
 本朝茶を愛するより昔巖岫天皇の時すまは思を發入の中世
 建仁寺の宗祖榮西入宋一茶をばつて本朝はゆりほりともなるた
 てよりゆり又の惠上人茶の實を梅の尾に掛けゆりあつて昔前法
 赤の園の赤今も存せり公方より猶とてあつて伏見よりゆりゆり
 仙とてあつてあつて茶を桂餅をつむの術を傳へ大内氏の人をして宇
 治に桂とてゆり其後森祝長井氏の人をして茶を製す其申
 森川下公方家の茶もあつて武衛家の園を朝日とて京極家の
 園を祝と奥山といふ近世上林の茶人丹波上林のつらゆり茶を
 あつてゆり一日を遊ひ遊ゆり又近世宗法橋のわたりとてゆり法
 師とてゆり茶店をかまひ諸人は茶を施して法橋ゆり其ゆり

申樂の狂言もゆり

類聚國史弘仁六年四月幸近江國志賀唐壽便崇福
 寺入御中署大僧都永忠手自煎茶奉御同年六月令發
 内并近江丹波播磨赤國殖茶毎年獻之

世は川魚といふもの湖魚のるるゆりゆりあつて海士のゆりゆり
 りり大佃若細四ツ午竹掛手丸唐細針茶かりく竹瓶あつて
 つらゆりあつてゆりゆり

傳漢三才圖會魚獵具 庖儀氏 結繩而為網罟

撒網 今も唐網 字彙云 罟ハ從上掩之網也
 撒網 収網 流水の中の小魚をすといふ罟なり
 文選ノ註 經ハ 網 如箕形 後 後廣之則也

かりくハ糸一線よりあみをおろし一線あみを引よせ一線を引
 をめして向うのほう細の中へ魚を逃せぬ形をよせあみを
 かりけあみといふゆりゆり

綽網 ぬいれありあ人共舟を以て水海きゆりゆり魚を逃よせ

ともし男のうけおひまりのきぬかりくよ

坐罾 提罾 籠 水中の魚をとく井也 魚ト同一

筭 胡筭 魚梁 竹筭 筌 籍 魚をとく井也

万系 山河亦其乎休而

古今六帖 やふ尺八川風をく吹きそ浪の花をまきまらり

鯉鮒ハ惣名ヲテ鯉の品類鮒のまじり其名かたふまじりぬるるる春ハ

山吹の子をひきき秋ハ鱒はまをちひに鮒鮒の名をまじり鮒鮒の味を

まじりつとよきものを鮒と名つけ惣々毛城子十里を去まじりや勢田鯉和

尔鮒 氷魚ハ近江よかき内膳式と田上ニ取進シタテ午治ニテル九月

ヨリ十二月マテ供之氷魚ヲトルモノヲ細代トモ也

不賀比 鮒ノフト鱒ノカト鯉ヒチ合テ其形トニル魚也鮒小鮒 鯉鮒 水鮒子

山水鮒 キ、鯉 鱒 小鯉 鱒 蛭 蛭 明 龜 石 龜 の 瀬 瀬 魚 を ま じ り 川

太郎の角力と好く

くつ物語 小あつと

君のわくわくありは川のあるところおきぬくよ

早大將殿よりあ田石よりく小あつとおきぬくよかたふしあ

ま本集 俊頼新田上は作らるにあの入は月のかつて魚のたふ

にらるるきよの月にやいはいをあらのたふとあつと

字長日記 産のふあるよりあつとあつとあつとあつとあつと

和名抄 鯉ありカシカハバカラカエとカトコトかひりてト罾とてよま

トホ東はあてカシカとつと

鯉王城五十里を去り来不考

氷魚を近江よかき 文中自註あり

鯉射の難 鯉はひのこいよ人の知るあつり解は乃乃ひ
ある日あるのぬいれは源三位をあらんとて宇治川を難と栞れぬ
とつて四題をうて一首よむべきやと作をわらふ

宇治川の淵くのぬちくおゆりハ氷をけいひたつりまきまきん
後撰和歌集 七月つきの日の雪うき水鳥を舟ておこまきゆりぬハ

宇治山のぬきまきんハ月影の中くゆりぬあつりあまき
射は難は射はうらこの色かき黒くまひよりぬき昔多く佳ぶるぬ
ハハヤはゆりぬとつてハ江戸の川をくわハヤとつて小魚のぬい

山吹の花も咲たり 射は乃乃 解は

吹草の 射は乃乃 解は乃乃 射は乃乃

川太郎と角力を好く 近江の里伝を 川太郎小虎はまきて人よ四ふ
とり角力よせんうらう角力よせんう時よ人よせんうすまひよせんといふ
時ハ近まといふ 水虎カワハ又川太郎
川太郎の書を去 菅野相の内歌 信傳よつて

いふつてのやうにせしむるあま川太郎氏と菅野

雄黄一名勢冠石 都て毒水怪をさる常よ大人小兒小塊を言ア
船と大洋百艘と船八百の浸津く浦く大丸よ小丸よ小るや川少座ハ
大名船と瀬傳鳥々川舟あり 段平と大石をつき 耕他の助也 追取馬
棚りハ舟座田船比良の八講お人湖上の風を忍び 勢義とハかせの定
らぬといふトイテハ日和風ハヤテと雨をささふ勢田風伊吹風ヤマセ
風ナカセ風サキ風ハ春風の春より秋より日ありしと根つてハ湖上の風の春
て空内ハ漕ぐ船となあめ外佛老人ハ踏蹴と吟す

万葉七 風守の風をさるぬひ考のま

淡海の海浪かこしは守り事やなえん徳ハありに

二月廿四日比良八講湖中船をさる風を忍び故也風の定ぬを
諦義といつたり瀬田風伊吹風やまき風なる風さき風なる
のちなる秋を根つて春をハ伊勢東風吹より船東浦をのるまハ
いぬる風吹よ西浦をのる風をさるぬひ考のま勢田ありしつて
吹草とこれハ勢田の竜神ハ舟生流しつてぬわらふ

新古今集 五十首 宮内

花ささく比良の山吹 吹雪のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく

湖上花

花ささく今入 願入 志望の浦 志望の浦

雲橋 近江の不二也 三上山 桐雨

花や浪 軒の下 柳鏡 嵐雪

春の水 杖 本丸 柳鏡 嵐雪

日野 梳の色 赤橋 許云

あめさよ 近江の人の 許云

近江とや 都をきき 花 櫻

若さよ 落片 舟のゆく 舟のゆく

川 昔よ 吹のゆく 吹のゆく

宇治川を 二人やく 舟のゆく

まる水や 舟のゆく 舟のゆく

三井の 十日の 小島

三井の 大根川

雪や 舟のゆく 舟のゆく

舟のゆく 舟のゆく

酒屋

真乃 鶴に袖をぬじ 山吹の 葉よ 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく

とてんそ天中へんうさるハ信草のせまうりて多とあごなりと云々人々浦のた
めもいかにあごるらん人々あごるる物おもひさうらんを友の夢を
こゝよのそりて顔のききあるらんこそうらんおのりさ亮とゆふの心
うけて柔懐食ととおもる情の花又顔もあごけらんをひききいなる人
より列て物おもるらんひんんとこれさありけとおひらるる

草花のさる散敷せん売と

兼日記 け日記をま考うつろ行脚の記

七日トロに素行といさるりて清水るは詰る

け文はけいあてりハ二万あまのりけ文はけいあてりハ二万あまのりけ文はけいあてりハ二万あまのり

け文はけいあてりハ二万あまのりけ文はけいあてりハ二万あまのりけ文はけいあてりハ二万あまのり

同日記といふ元禄戊寅七月長壽

け日十里亭といふけいあてりハ路の去来あてりせうりて文西は風雅の

眼をさし長壽は卯七のちうとあてりいんせうりておのこせり又け地

あてり酒は地ひ者あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰

錦標も能もといふ日あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰

十日丸山の賦あり

十日流の去来きき人々おろくけ人々父母の墓あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰

人々おろくけ人々父母の墓あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰

牡年魯町と魯町のるりて卯七素行々共ゆらん事をおりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰
外の人も入つて大草うらに野童やもらん正秀ハいかにあてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰
秋やまらん野童やもらん正秀ハいかにあてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰
まろておろくけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰
戸なやあんと是をといひけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰

そくさい乃敷又とつれん嵯峨の柿 去来

柿のゆらあてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰

年乃長峰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰

人々おろくけ人々父母の墓あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰

魯町あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰あてりけいあてりハ下の風流誰

あの賦ハ未の上をいひ登るも草花の着くつひわけてさうかしの女
 花といふもそのあはれは賦をすく女の上のたうらさきを破の
 厚くつひ登波の草のみいふあきりなと事とあめて文をかかへり
 支那の毛毳の飾玉の形を日中よ著る其昔々伊勢の大湊まより
 泉品塚よつし又流あり博多よりつし肥前平戸は流れて寛永まより
 年今の長崎とらるる風土鳴りて冬月雪降りひるは橙を柱て酔よ
 用ひ琉球芋芋赤白の二果あり赤甚あり大根ありみりけうの尾と
 つし長崎市中海岸よあをゆる故よ石階あり風俗を婦人生涯眉を
 刺し指よ金物と入る放言あり一二とあすえをばボウ婦又娘をゴゴ人の
 妻をチカワサと色情をこやス石壇をキハ四とバセウ松里ありとあはれを
 スまつり唐幸をコシヤウ物とあはれをこやカヂイ是れとこをネよやとを
 マット靴をキヤシ又言の中ハワチトつらありあり
 浙江の程赤城雪中庵草太り五月の日あるねひそくたの月といふ
 を感して詩を賦して送らる今雪中庵よ賦す

唐傳よ返すも唐の別よこころを 詩云

田上つふ山ふり

山あらし 魚くまうへり 甲指の服 まま
 控のあはれ色もさむるや 秋の空

日あ 名月 張心

ふるさとも今ハあやめや けうりき
 水ものくろくろりや 足の下

ちぢみよいふあよせ菩薩念 八月廿日 東きり道よ

唐人入使の形もに神を礼を礼を立朝暮あけおろし
 金鼓と吹してこゝろあはれ舟草才一媽祖又姥媽といふは福
 兵化林氏の女自大海は改し神とらる神具靈現海河の船とらる
 天妃聖母のそを賜るす観世音の化とす神祇天后の東
 王冠の上の孔雀をいづき左右よまは鷲をまはふまは同帝
 十禅寺村唐人入路次金鼓あやむるを吹写し

守護す所帳の計... 又長安唐人の寺あり南京あり...
 寺福如く崇福寺漳州福洲も各禅宗菩薩の末寺なり
 八月廿二日... 菩薩あり唐人の日... 諸して... 捧を
 うちて... 十禅寺... あり... あり...
 崇寧中... 唐人... 諸の... あり... あり...
 ... あり... あり...
 ... あり... あり...

風俗文選大註解卷之貳下尾

祥甘藏板

